



片倉もとこ記念沙漠文化財団 ニューズレター

2017. 10 No.5



エジプト・カイロ市内のスーク(市場)で売られている色とりどりのランタン (遠藤仁撮影)

● もくじ

- | | | |
|--------|--|--------------|
| P2-5 | (特集：2017年のラマダーンに寄せて)
中国都市部におけるムスリム・コミュニティ遼寧省瀋陽市を例として— | 金 博諒 |
| P6-7 | (読み物) 沙漠とオアシスでかんがえる | 梅村 坦 |
| P8-9 | (読み物) 万葉集とウイグル文化 | ムカイダイス |
| P10-11 | (報告) サウジアラビア、ダンマン国際会議出席報告 | 河田 尚子 |
| P12 | (本の紹介) 『イラン研究 万華鏡』 | 原 隆一 |
| P13 | (本の紹介) 『大野盛雄 フィールドワークの軌跡 I』 | 原 隆一 |
| P14 | (本の紹介) 『サトコとナダ』 | 渡邊 三津子 |
| P15-16 | (特集：2017年 アスタナ国際博覧会)
ユーラシアの「心」での「アスタナ国際博覧会」 | ジョルダヤコヴァ・サウレ |
| P16 | お知らせ・編集後記 | |



図2. 瀋陽回回営の詳細図 (Google map に基づき筆者作成)

五哥院牆」の文字が見える。つまり、瀋陽回回営における最初の回民の存在は、元朝の至正十二年（1352年）に遡る。また、瀋陽回回営の中心モスクである南清真寺（現存）の歴史をみると、回回営が形成され始めた時期は、明末清初の時代であり、回回営の発展期は、清朝末期（左宝貴の時代）であると推論される。

瀋陽の回回営は2000年前後の都市開発によって、土地面積が半分くらいになった。筆者は、日本側の歴史資料と現地での人類学調査を通じて、伝統的な回回営の地域構造を復元した（図1）。

現在の瀋陽のムスリム・コミュニティについて、筆者は長期的なフィールドワークを通じて、その詳細図（図2）を作成した。

まず、ムスリムの生活の中心となるモスク（中国では清真寺）について説明していきたい。図2☆印は、回回営の中心である南清真寺（モスク）である。南清真寺の北方300メートルほどに位置する△印は、現在では機能していない東清真寺である。『瀋陽回族志』（1996）によると、この東清真寺は1803年に、馬成遠という人物のサダカ^{（注1）}（喜捨）によって創建された清真寺であったが、文革時代に破壊されたという。現地での聞き取りによると、1990年代以後に少し修復作業が行われたが、現在は清真寺として機能しておらず、現地民衆の言葉を借りれば「インチキ美術家の展示室」として運営されている。

モスク以外に、このムスリム・コミュニティを構成する主要な要素は、2つの回教の商業施設である。図2の△印の南側に「あ」と示す地区は、清真美食街（写真1）という飲食店街である。現地調査の結果によると、この町はかつて『東寺胡同』と呼ばれたところで、1990年代末期の回回営の土地開発に先立って、開発予定地域の飲食店を営む回民の一部がここに移住してきた。それらがこの商店街を構成

するきっかけと主体となったという。近年、このムスリム・コミュニティが所在する行政区の役所は、地域観光産業振興のため、2016年の10月頃に、この飲食店街全体をリフォームした。ちなみに、この地に、瀋陽へのムスリム居住が始まったとされる1352年に因んだ数字（高さ13.52メートル）のモニュメントが作られたことは、興味深い。

一方、図2の「い」の位置に「西関回民市場」（写真2）という商業施設がある。1988年、政府は、この地区の回民住宅地と露天市場を改造し、そこに新たに建設されたのが「西関回民市場」だった。新しくできた市場は2階建ての建物である。その土地面積は3393.15m²であり、建築延べ面積は6786.30m²である。南北の距離は99.07m、東西の距離は34.25mである。その中に67軒の店舗と常設屋台131がある。経営者は全員が回族である。清真（ハラール）の肉類、野菜、ムスリム日用品、回民点心やお茶を扱う店などの外に、大規模な飲食店もいくつかあり、瀋陽市内の回族を中心とするムスリムが葬式や結婚式、様々な記念日の宴会をするための場所となっている。「あ」「い」を比べてみると、「あ」（清真美食街）が民族を問わず、市民一般、観光客にも開か



写真1「清真美食街」（2011年9月）図3「あ」



写真2「西関回民市場」（2014年12月）図3「い」

れた飲食店街であるのに対して、「い」（西関回民市場）はどちらかというと市内の回民の日常生活のための市場といえることができる。

瀋陽ムスリムの食生活

最近、日本のニュースや新聞で、「ハラール」あるいは「ハラール食品認証」などの用語が多くみられる。「ハラール」は、アラビア語で「許されている」という意味である。

ムスリムの生活全般は、イスラーム法であるシャリーアに従わなければならない。その中、食生活において、シャリーアは死肉、血、豚肉、アッラー以外の名を唱え（殺され）たもの、絞め殺されたもの、打ち殺されたもの、墜死したものや角で突き殺されたものなどを禁じている。すなわち、以上のものは「非ハラール」（許されていない）（ハラーム）のものである。

中国の回族は、元代からアラビア語、ペルシア語やトルコ語などの言語が禁止されたため、ハラールという用語の使用が極めて少なかった。その代わりに、現在に至るまで「清真（QingZhen）」という漢語を使用するようになった結果、マジョリティである漢民族の多くは、イスラーム教を「清真教」と呼ぶ場合が多くなった。こうして見ると、ハラールは現在の日本と中国にとって新しい用語であるが、「清真」という言葉を知らない中国人は非常に少ないといえる。

本文の「回族とは」の部分で、回族は中国の少数民族の中で、最も分布が広い民族であり、中国の各地域で独自の文化を形成していると紹介した。そのため、回族の食生活も各地の風習に従って、極めて多様である。以下には、瀋陽のハラール食品を中心として紹介したい。

まず、瀋陽回族の主食は、「面食」といってよく、めん類など小麦粉で作った食品が非常に多い。その傾向と伝統を代表する料理店として、金家餡餅（写真3）、林家包子、王家餃子や脱家包子などがある中で、三盛軒餃子館と馬家焼麦は中国政府に「中華老字号（中国を代表する古いブランド）」と認定されている。

また、瀋陽の回族料理では、野菜料理は非常に少なく、肉料理が中心である。葱、生姜、八角や花椒などの調味料で、ゆっくり煮込んだ「清炖牛肉」（ビーフシチュー）は肉料理の基本である。「清炖牛肉」に様々な新鮮野菜を加えて、多様な料理になるが、「乾菜」（乾燥野菜）を加えた「乾菜炖牛肉」は絶妙である。瀋陽の冬は非常に長いし、温室のない時代に新鮮な野菜は存在しなかった。そのため、秋になると新鮮な野菜を乾燥させ、冬の「煮物の友」として使うのである。

瀋陽回族の一般外食は、写真3のように、餡餅（牛肉のパテ）を主食として、扒肉条（蒸した牛肉煮）、爆肚（牛のセンマイをゆでたもの）や溜肉段（揚げ肉の塩辛炒め）などの肉料理をメインとして、牛肉のスープを添える。ちなみに、この写真は二人前である。

瀋陽の回族は食後に、ジャスミン茶を飲みながらお菓子を食べる習慣がある。そのお菓子の製造技術には、中東や中央アジアから伝承されたものがあり、中国の漢族や満州族などの製造技術も採り入れている。中華人民共和国成立後の経済変化は、回族伝統のお菓子の製造技術にも大きな影響を与え、特に近年、伝統的なお菓子は極めて少なくなっている。今回、筆者は回族菓子屋の王氏（回族伝統菓子の職人）に、伝統菓子の再現を依頼した。写真4で示したのは、「京八件」という清朝の宮廷のお菓子から、吸収・再構成した瀋陽回族のお菓子である。



写真3. 瀋陽回族の一般外食
（趙亮 撮影）



写真4. 瀋陽回族の伝統お菓子とその職人王墨海氏
（韓春梅 撮影）



写真5. モスク内のムスリム達 (筆者撮影)



写真6. 2013年開齋節前日の南清真寺周辺 (筆者撮影)

瀋陽の開齋節 (ラマダン明けの祭)

中国の祝祭日は、主にマジョリティである漢族の伝統に従って設定されている。だが、公式的に、中華人民共和国憲法に従って、少数民族は独自の祝祭を行う権利がある。瀋陽の回回営内を生活の中心とするムスリムにとって、他の中国ムスリムと同じく、「開齋節 (イード・アル=フィトル)」（ラマダン明けの祭）と「古爾邦節 (イード・アル=アドハー)」（犠牲祭）が最も重視される祝祭日である。

実は、中華人民共和国成立後、文化大革命を経て、様々な社会活動や宗教活動などが停止された。しかし、改革開放後に、政策の緩和とともに、一連の活動がよみがえるようになり、2000 年からは、急速な経済成長と 2008 年オリンピックを経て、政府は少数民族による経済活動にも関心を持ちはじめた。こうして瀋陽の場合は、2つの祝祭日の経済利益が大きいということで、祭典と関連する経済活動や宗教活動について、一定の自由が認められるようになった。

以下には、瀋陽の開齋節について紹介する。近年の瀋陽の開齋節について、最も大きな変化は多元化とグローバル化である。写真3のように、中国西北地域からのウイグル族やサラル族などが増えただけではなく、パキスタンやエジプトなどからの留学生の人数も非常に多くなっている。礼拝所の一角は殆ど中国以外の方が占めることとなった。

また、近年の開齋節の前日には、瀋陽回回営の南清真寺の周辺に、ムスリムの食品工場や伝統飲食店などが必ず屋台を出し、たちまちその地域は露天市場に早変わりする。例えば、写真4のように、2013の開齋節の前日に、豪雨にもかかわらず、早々に露天市場が形成された。

開齋節当日は、ムスリム・コミュニティ内のムスリムだけではなく、瀋陽市および周辺各地のムスリムが南清真寺に行って自分達の祝祭に参加し、最後に、周辺の露天市場に繰り出していく (写真5)。

近年の開齋節が抱える問題について見ると、参加する人

数が多くなってきたため、モスク内の3つの礼拝所は十分となりつつある。そこで、清真寺内の敷地内にじゅうたんを敷いて礼拝することが多くなった (写真6)。

本文では、まず、中国へのイスラーム伝来と中国内に現存するイスラーム系民族を概観し、その後に、中国都市部ムスリム・コミュニティの1つの例として、瀋陽の回回営の総体像を把握して一般的な理解を共有した。最後に、瀋陽在住ムスリムの生活実態の一端に触れるために、近年における瀋陽の開齋節 (イード・アル=フィトル) を紹介した。中国都市社会におけるイスラームの具体像をいささかでも知っていただければ幸いである。

(注1) イスラームにおける喜捨は、ザカートとサダカに分かれている。ザカートとは、イスラーム教の五行の1つで、困窮者を助けるための義務的な喜捨、あるいは制度的な喜捨で、イスラーム国家の税金の一種にあたる。一方、サダカとは、各個人が自発的に行う自由喜捨である。



写真7. 2015年開齋節当日 (韓春梅 撮影)



写真8. 2015年開齋節、礼拝所の外 (撮影者 撮影)

沙漠と オアシスで かんがえる

梅村 坦

写真2. オアシスの平和

中国、新疆ウイグル自治区の「疆」という漢字について、毛沢東が語ったという伝説がある。党の地方機関紙ともいえる「新疆日報」の題字を決めるときのこと。「疆」のツクリだけを採ったこの文字は、新疆の自然地理をよく言いあらわしているというものだった。二つの「田」は盆地というか平地で沙漠。上はジュンガル盆地、下はタリム盆地。横棒は上からアルタイ、天山そして崑崙という三つの山脈である。なかなかうまくできた譬えだと思う。たしかに新疆の風土を俯瞰するのにとても便利だ。

こういった土地を歩きまわった年月からずいぶん時間が経った。ここではタリム盆地つまりタクラマカン沙漠の南側のオアシスあたりのことを思い出してみたい。

チェルチェン（且末）オアシスに滞在中のこと、暇だったこともあり、村はずれの防風・防砂林から歩いて沙漠にむかった。タクラマカン沙漠の中で一夜をすごしてみようという意気込み。晴れわたっていたが幸いにして風はない。それでも無謀をいさめる仲間を、緑が見えなくなる先へは進まない、と約束して「冒険」へ旅立った。



写真1. バルハン砂丘

帽子とサングラス、長袖の5人はそれぞれテント、水と食料などを担いで平らな砂地を歩きはじめる。汗は瞬時も肌にとどまらない。砂はしだいに柔らかく、つまり厚くなってきて、じきにタクラマカン南部特有の砂丘の群れに入っていく【写真1】。砂丘を回りこむたびに村の緑の影は隠れ、特別高い丘と丘の間を野営地と決める。バルハン型と呼ばれる砂丘は、風で移動してできあがったものなので、大きなものになると、なだらかな風上の側からでないと登れない。一步ごとにその分の砂が崩れ、ようやくにして頂上で息をととのえオアシスを望めば、たったこれしか歩いてこなかったのかとがっかりし、ふりかえってタクラマカンの見事なほどの果てしなさに茫然と我を失う。

陽の高いうちに、砂丘の風下の麓にテントを張り、近くにスコップで直径も深さも1メートルほどの穴を掘り、底の真ん中にカップを置き、厚手のビニールで穴をふさいで中央部にわずかに窪みをつくる。トイレ？ まさか！

日没とともに気温は急降下。黒へとむかって空の色が変幻していくにしたがって星が輝きはじめるが、なかなか期待ほどの満天星とはなっていない。やはりオアシス近くなので湿気もあるのだろう。あるいはタクラマカン全域から高く巻きあがっている砂が視界をさえぎるのかもしれない。天山山中や青藏高原などから星空を見あげたときは、宇宙の闇の空間よりも、ひしめき合う光の粒の面積のほうが勝るのではないかと感じ、天の川をミルクウェイとはよく言ったものだと思えた。沙漠の夜の光感覚は、それよりずっと鈍いものだった。変わらないのは完璧な静寂。人間やその造形物とは反対の概念がそこにはあった。人工衛星だけが異彩を放っていた。その幾筋もの光跡を追っているうちに、なぜか安心して眠りにおちた。

翌朝はやく、太陽がテントを襲ってくる前にビニールを

そっと持ち上げて砂の穴を覗く。中央のカップに水がわずかながら溜まっていた。深い砂の中から蒸発して閉じ込められた水分が、夜の冷気で結露してビニールから滴り落ちたという理屈。沙漠で水を採る実験は成功。きのう休憩で捨てたメロンの皮にとびついてきたトカゲも、ふだん昼間は数センチで温度が下がっている沙漠にもぐって「冷」と「湿」を確保しているのだ。沙漠の上空と地下の姿を垣間見たわけではあったが、表面カラカラの沙漠からオアシスの端に戻って、引かれた水に思わず素足を浸した。全身に沁みわたると感じ、ああ、人間は水分でできているとつくづく思ったりした。わずか一日の沙漠体験にすぎなかったのに。

* * * * *

閑話休題。タクラマカン南縁で砂の侵入を防ぎながら維持されるオアシスから、中国経済大発展の波が歴史の伝統、地域の特色を押し流そうとしている。30年ほど前には、まだまだ素朴な、いってみればながい歴史の連続を感じさせる姿が残っていた。古いことが良いなどと言いたいのではない。土地の人びとが変えたいものは変わればよいし、けれど残したいもの、身についたものはけっして奪われる筋合いはない【写真2】。

オアシスの農村で大がかりな、伝統にのっとった結婚式があった。花嫁の実家に花婿の友人たちが結納の羊をつれて押しかけていく。村で1台の大型トラックに鈴なりの人。木戸口で、結納の金額が足りないから入れてやらない、いや約束どおりだから入れろ、と押し問答。折り合いが付き、イマームの立ち合いのもとで契約にもとづく婚儀がおこなわれたところで、男衆が絨毯に嫁を乗せて奪っていく形となった。花嫁の実家には女性があつまり、花婿の家は男性であふれている（僕はこちら側にしか参加できなかった）。家屋の内外で、ポロ（ピラフ）やケバブ、羊の丸焼きをはじめとする大量のごちそうが出て、みなが入り乱れて踊り

まわり、新郎新婦も登場する盛大な宴会という段取りになるまでも、なってからも、誰かが仕切って案内をするわけでもなく自然にものごとは展開していく。われわれのような突然の来訪者もいっさい拒まれない。料理も酒もふるまわれる。その最中に、まじめな祈りの場面があるかと思うと、やがて歌舞音曲のおおさわぎ。たのしく弾けるような祝いの時間が、いつまでも村じゅうで共有されていく。酒をのぞけばアッラーへの帰依とその規範が、折り目を形づくっていた【写真3、4】。

ムスリムであれば、民族を問わず結婚式の形は共通しているところがあるようで、月日経っても、あるいは農村、大都会を問わず、その基本はかわらずに保たれていると思う。ただ楽器をかき鳴らし、吹き鳴らす車列が都会の町なかを練りまわるようなことは許されなくなったり、年々派手になる披露宴もすっかり商業化されたり、といった変化も大きいようだ。最近のオアシス農村の結婚式事情は確かめていないけれども、ムスリムの宗教的日常生活への制限状況をみると、人びとが自らのしきたりどおりに平安な気持ちをもって暮らしているとはとても思えない。そもそも、2001年9月11日アメリカでの同時多発テロ事件以来、ご多分に漏れず世界の「反テロ」大合唱団の団員となった当局が、それまで以上にイスラーム一般に厳しい対応をとってきたところに淵源があると僕は考えている。外部からも持ち込まれるいくつかの過激行動、民族対立事件、そのたびごとの取り締まり強化。ムスリム住民の心は圧迫感にさいなまれ、多方面で不満がたまっているにちがいない。

こんな心と社会の閉塞状況をかんがえるにつけ、たとえ当の住民でなくても、自然の摂理の絶対性のようなものに気づくことがある。さらに、自然の下にいる人間にとって神の摂理とは何なのかとか、人間社会秩序は何のため誰のためにあるのかといったことがらをかんがえ始めるきっかけさえ、沙漠とオアシスの対比のなかから生まれてくるような気がする。



写真3. 結婚を祝う楽団



写真4. 結婚式の祈り



万葉集とウイグル文化

ムカイダイス
(放送大学面接授業講師)

私が「日本」を知ったのはとても小さい時、まだ小学生になる前の話である。私はウイグルの南の田舎町の母方の実家に預けられていたが、その村に日本から来た青年がいて、現地で綿の栽培などを教え、農業指導をしていた。私の祖父や村の人々はこの日本人青年にとっても好意的で、何かと頼りにしていたことを覚えている。とても小さかった私には、この日本人の青年がどのような経緯でウイグルの奥地まで来て、人知れず現地の人々の為に汗水を流していたかは分からなかった。

その後 2011 年 3 月 11 日の『東日本大震災』の時には、村人たちがモスクに集まり遠く日本で亡くなった方々のご冥福と日本の復興の為に祈りを捧げたという話を聞いた。「昔、ここに日本人が来てくれたことから、『日本人のお兄さん』の国、お世話になった国、日本の人々は世界の貧しい、辺鄙な地域に惜しみなく慈しみの手を伸ばしてくれる強い国だから、きっと早く立ち直れるだろう。」と皆が話していたという。

この「日本人のお兄さん」の顔はうろ覚えだが、一生忘れない鮮明な記憶の一つである。彼の姿が私に「日本」というものを最初に教えてくれたのだった。

さらに日本文化に強く惹かれるきっかけになったもう一つの体験がある。私は以前上海の大学でロシア語学科に在籍していた。その大学の外語学部には日本語学科もあった。学部で新年会パーティがあり、教授や学生たちが会話を楽しみ、面白い話題に皆で盛り上がった時のこと。この時何気なく笑う時ごく自然に自分の手で口を塞ぐ仕草をしていた私に、東京から来られた日本語学科の教授が流暢な中国語で「あなたは日本人みたいです。明治生まれの日本人のようですね。あなたはウイグル人でしょう？美しい仕草ですね」と言っていた。私はとても嬉しく、この時の言葉が私に与えてくれた自信とありがたみはとても大きかった。日本に行って日本文化を学びたい、口を塞いで笑う仕草が、何故「明治生まれの日本人」に似ているのか知りたいという思いが心の中で芽生えた。なぜなら、口を塞いで笑う仕草を教えてくれたのは田舎の私の祖母だったからである。

その後、幸いにも日本に來ることができ、私の夢だった日本の民俗学を学ぶ機会に恵まれた。そして「万葉集」に辿り着いた。ウイグルから「万葉集」までのこの道程が、家から月までの距離にも思える時がある。

しかし「万葉集」は、最初の歌から私には懐かしく、美しく、親しみやすく感じられた。日本の古文の難しさを通り越して、いつのまにか私は「万葉集」の 4516 首の歌の虜になっ

ていた。分からないことはたくさんあったが、なぜか「難しさ」は全く感じなかったことが「不思議」に感じた。そしてこの「不思議」の答えを、私は「万葉集」の中にある「言霊」に見つけることができた。

「言霊」文化はウイグルにも存在する。第一巻・第一歌から、ウイグル人の私は何故か「言霊」で始まっている歌と直感し、私なりに理解することができた。

籠（こ）もよ み籠（こ）持ち 掘串（ふくし）
もよ み掘串（ふくし）持ち この丘に 菜摘（なつ）
ます兒（こ） 家聞かな 名告（なの）らさね そ
らみつ 大和（やまと）の国は おしなべて われ
こそ居（お）れ しきなべて われこそ座（ま）せ
われこそは 告（の）らめ 家をも名をも

雄略天皇の歌で始まる万葉集のこの歌を見て、私は「この娘さんが持っている籠が良いということは、籠を造る柳が良く育つ豊かな土壌があり、そこには籠作りの腕のいい職人もいて、良い籠を造っている。さらに腕の良い鍛冶職人がいて大工もいて掘串を作っている。そのような二つ良いものを持った、ゆとりある家の娘が丘で菜を摘んでいる。」と自分なりに解釈し、ここから豊かな風土と安定した人々の暮らしを伺うことができた。

若菜摘みの行事はウイグルにもある。春の初めに野に出て若菜を摘み、この若菜で料理を作って親に食べさせることはこの上ない親孝行とされている。厳しい「死」の冬を通り越して芽吹いた若菜には生命のエネルギーが宿っており、それを食べることは大変縁起の良いこととされているのである。

ここに若菜を摘み親に食べさせようとする育ちの良い優しい娘がいる。娘にとって畏れ多いが天皇と出合い、新しい何かが始まる予感にときめく。天皇と一般の娘の出会いの話もまた、平民と天皇が大きな隔たりなく暮らす平等な国のイメージにもつながっている。

雄略天皇の歌から、皆が平等で平和に暮らす幸せな国と豊かな国土、素敵な出会いから生まれる新たな未来が、子孫繁盛……、豊かな大和国家のイメージが目に浮かぶのである。何とめでたい歌なのだろうか。一つ一つの良い言葉には善き願いが込められている。「万葉集」の第一歌にもっとも相応しいこの歌に感動を覚えた。

日本と同様、ウイグルにも「言霊」の文化が存在すると先に述べたが、日本では最近「言霊」と言うと、マイナスの言霊の実現を防ぐような「縁起でもないことを口にする

な」といった意味合いが強いように見受けられる。しかし元来言霊信仰といえば、「言葉に霊力が宿る」と信じ、「良い言葉と善き願いの霊力により、良い事を運んでくれる」といった意味合いの方が重要視されているのではないだろうか。そしてウイグルの「言霊」信仰は、シャーマニズムを信仰していたはるか遠い昔から存在していたと言われている。現在のウイグル人の暮らしの中でも、言葉や諸々の行事の中に「言霊」信仰が残っているのである。

朝から意識的に善い願いを良い言葉に込めて話し、良い結果につながるように努める。日本と遠く離れたウイグルでもこのように似ている文化があることは、古代から人や文化が国を越えて交流しているという事実に思いを馳せ、私たちの心を豊かにすることに繋がるのではないだろうか。

* * * * *

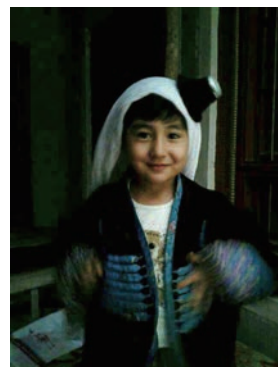
このように私は今、「万葉集」のウイグル語訳に挑戦しておる。私は以前ウイグル詩人の第一人者であるアフメットジャン・オスマン氏と共に「百人一首」をウイグル語に翻訳させていただいたが、今回当財団の藤本悠子氏に「万葉集」の翻訳を薦めていただき感謝している。4516 首の歌を、心を込めて翻訳する仕事をやり遂げることでこれに応えていきたいと思っている。

ここで「万葉集」のウイグル語訳を進めているうちに、私は「万葉集」をウイグル語に翻訳するために日本に来たのではないかとの思いが芽生えてきた。ウイグル語と文化が危機に瀕している今、「万葉集」のウイグル語訳の完成がこの危機をチャンスに変えるきっかけになってくれることを願う。

さて、2017 年 11 月 25 日に放送大学文京学習センターホールにて「音楽・舞踊・詩を通してウイグルの魂に触れ合う」という趣旨でウイグル文化の夕べが財団の協力により開催される予定である。ウイグルを代表するドイツ在住の音楽家と日本在住の若き舞踊家を招聘する予定で、皆様のご来場を心待ちにしております。

最後に「万葉集」のトリを飾る歌により本文を締めくくらせていただき、読者の皆さまのご幸運を祈念したい。

新しき 年の始の 初春の
今日降る雪のいや重け古事



ウイグル娘

1. 出発まで

第二回ゆとりぎ賞受賞者、アブドゥルラヒームさんからのお誘いで、2017年3月25日から31日まで、サウジアラビアのダンマンに出張する機会をいただいた。今回の出張は、サウジアラビア東部州文学クラブが3月26日から28日の間にダンマンで開催する国際会議に参加し、その機会にワーディ・ファータィマも再訪することを目的としていた。これから行う片倉もとこ先生による半世紀の研究のフォローアップ調査のためには、ワーディ・ファータィマにおいて人間関係を確立しておくことが必要となるためだ。しかし、一筋縄ではいかないもので、当初は、私を含む3名で参加する予定だったが、ビザが入手できないまま出発日を過ぎてしまい、結局、私一人での出席となった。当然、ワーディ・ファータィマでの調査も私一人ということになり、一気に不安になった。しかしダンマンの会議にはアブドゥルラヒームさんもお出席の予定なので、協力いただければ何とかなるだろうと考えていた。ビザのほか航空券などすべての手配が終わったのは出発日、3月25日の午後のこと。このときほど「インシャーアッラー」という言葉を身に染みて感じたことはなかった。

2. 東部州文学クラブ会議 第一日目(3月26日)

会場はダンマンのシェラトン・ホテル。文学クラブ事務局長のブーデイさんはじめスタッフの方々に暖かく迎えて

いただいた。私のスピーチは明日の11時からのセッションの予定となっていた。

会場は男性用と女性用に分かれていて、男性の会議場の前の広いスペースが展示場になっていた(写真1)。そこに我が財団用のブースも用意されていた(写真2)。さっそく日本から持ってきた片倉もとこ先生の本や財団のパフレットを並べ、ワーディ・ファータィマの写真パネルを飾った。すぐに出席者の人たちが大勢寄って来て、いろいろな質問を受けた。日本にこのような団体があることに、興味を持っていただけたようだ。展示場は男女分かれているわけではなかったが、女性の姿は少なかった。

女性の会場には大きなスクリーンが設けられ、男性会場で繰り上げられる活発な質疑応答の様子が映っていた。会場奥には、コーヒーや紅茶、ナツメヤシや甘いお菓子がふんだんに用意されている。女性たちは、お菓子をつまんだり、時には隣のメンバーとおしゃべりしたり、マイペースで会議の映像をながめていて、男性会場から見えないののいいことに？のんびりとした雰囲気だった。会場到着が4時過ぎだったため、女性メンバーに自己紹介したりしているうちに初日のセッションは終わってしまった。地下レストランに豪華なディナーが用意されていたが、食事もそこそこにスピーチ原稿を仕上げるべく眠れぬ夜を過ごした。

3. 会議 第二日目・三日目(27日、28日)

朝9時からのセッションで報告されるマルヤム・アッザ



写真1. 東部文学クラブの展示ブース



写真2. 財団展示ブースの様子(左:ブーディ事務局長)



写真3. 東部州文学クラブ会議でのスピーチの様子

フラニーさんという方から2日目の発表内容について簡単に教えていただいた。アラムコがサウジに持ち込んだ異文化の影響（制服を着るという新しい文化をサウジの、特に若者に広めたことなど）、若者のインターネット上での文学活動、ジーザーンの文学クラブの活動報告など。マルヤムさん自身は、サウジ・ビジョン 2030 *に民間の文化組織がどのように寄与できるか、という問題を扱っているという。

私のスピーチでは、もともと先生の業績と沙漠への思い、それを受け継ぐ財団の活動を紹介し、急速な近代化を遂げても消えないアラブの偉大な文学の伝統、特に詩の文化への敬意について述べた（写真3）。サバーフさんというダンマン大学の児童文学を専門とする助教授の女性が通訳してくださることになった。彼女とはぴったり息があい、スピーチはとどこおりなく終了。ぶつつけ本番だっただけに、サバーフさんには感謝してもしきれなかった。

セッション後にアブドウルラヒームさんとお会いし、ワーディ・ファールティマ調査についてのアドバイスを求めると、開口一番、「このままダンマンから帰ってはどうか」とおっしゃる。自分は今夜リヤドに帰らなければならないし、ジュムムの社会開発センターで誰かに頼むのも難しい。また、今回いきなり一人で行っても、なかなかスムーズに調査はできないと思う、とのこと。この会議で、沙漠文化財団について、好意的に認識してもらえた。今回はこれで良しとして、日本に帰ったほうがいいだろうということだった。財団には申し訳ないが、私のアラビア語能力を思えば、ここはそのアドバイスがベストに思え、それに従わせていただくことにした。

3日目はペルシア湾岸の港町、ダーリーンへのエクスカーション。古い要塞を利用したダーリーン・ビジターセンターを訪問した（写真4）。ここにはダウ船の模型や生活用品がたくさん展示されており、昔のダーリーンの生活が再現されていて興味深かった（写真5）。また、セッション会場ではお話できなかったタジキスタン、セネガル、トルコ、クウェートからの参加者の方々と交流できた。ダーリーンに向かう途中、4隻のダウ船が舳をならべてゆったりと海に浮かぶ姿が美しく、忘れられない光景だった。

今回、ワーディ・ファールティマに行けなかったのは残念だったが、私の実力ではこれが精一杯だったかと思う。素晴らしい経験をさせていただいたサウジの方々に感謝したい。

*サウジ・ビジョン 2030: 2016年に発表された、石油依存体質を脱却するための経済改革案。「活気ある社会」「盛況な経済」「野心的な国家」という3つの柱に基づく。



写真4. ダーリーン・ビジターセンターへのエクスカーション



写真5. ダーリーン・ビジターセンターの展示（ダウ船）



原 隆一

『イラン研究 万華鏡－文学・政治経済・調査現場の視点から－』

原 隆一・中村菜穂 編
大東文化大学東洋研究所



この本は、大東文化大学東洋研究所の共同研究部会の一環として、2012年度から2016年度までの5年間にわたっておこなわれた共同研究「イラン文化圏における伝統と変容」の成果のひとつである。当初の小さな研究会は年ごとにメンバーが増え、2016年度には12名の研究グループへと大きく成長していった。それに伴い、研究員の専門領域は文学、政治思想、経済学、歴史学、建築史、技術史などの多領域となり、また、対象地域も隣接するトルコ圏やアラブ圏へと広がっていった。そのため、本書の題名にあるように、多様な視角、様々なプリズムをとおしてみたイラン文化圏における伝統と変容に関する論考集である。

私たちがここで「イラン文化圏」と呼んでいるのは、現在のイラン国を中心に、周辺のアフガニスタン、タジキスタン、クルディスタンなどを含む広

域文化圏のことをさす。イラン系民族、ペルシア語系言語、太陽暦の春分を新春（ノウルーズ）として祝う古来の慣習や生活リズムなどに特徴がある大きな一括りを指している。

それは、インド文化圏、中央アジア・トルコ文化圏、アラブ文化圏など隣接する周辺の文化圏との歴史的交流のなかで育まれたものである。また、文化は、人間の生活舞台である自然生態環境、生業を基盤とした経済・技術活動、その上に展開する社会や狭義の文化を含む総体をここでは意味している。

本書の特徴として次の3点をあげたい。

第1に、執筆者たちは、イランでの現地滞在経験があり、ペルシア言語やイラン文化との長い交流経験がある。ペルシア語文献資料を読み、ペルシア語で農民や遊牧民から話を聞き出して集めた一次資料に依拠した研究である。

第2に、歴史研究ではなく、われわれと同時代を生きている人びとを対象とする現代研究である。もちろん、あらゆる社会が歴史社会であることはいうまでもない。そのかぎりでは現代から時間を遡行するかたちで、その社会と人びとの変化を追求する研究スタンスをとっている。

第3に、イラン社会研究は、すなわちイスラーム社会研究のことである、という立場はとっていない。イスラームという宗教の大きな影響は否定しない。が、すこし距離をおいて、長い時間軸の文脈のなかでイラン社会や文化を、そして、イラン人を眺めていこうとする立場にある。

本書の内容は次のとおりである。

第1章「アラス河の北と南で一ふたりのアゼルバイジャン語詩人とそれぞれ

の「ヴァタン（Vatan）」（石井啓一郎）
第2章「フォルグ・ファッロフザードの空間イメージについての一考察－紀行文「異国にて」を手掛かりにして－」（鈴木珠里）

第3章「詩作と国境－ミールザーデ・エシュギー（1894-1924）の描いた戦争のカリカチュア－」（中村菜穂）

第4章「近代イランにおける「宗教」概念－キャスラヴィーの『イスラームについて』から－」（斎藤正道）

第5章「20世紀における日本とイランの経済関係史」（ケイワン・アブドリ）

第6章「ガージャール朝期（1796～1925年）のテヘランにおける住宅建築の変遷」（ソレマニエ貴実也）

第7章「テヘランの脊髄損傷者の生活状況－環境、家族・夫婦の関係性、社会とのつながりに注目して－」（細谷幸子、アッバース・ノウルズィー、アリーレザー・ニークバフト）

第8章「イランにおける遊牧民の伝統技術とくらし－天然染料の知識と記憶－」（深見和子）

第9章「ギーラーン州の聖所の現状と変化」（清水直美）

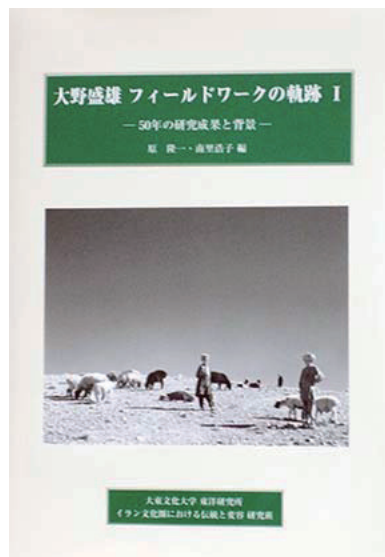
第10章「フィールドワークからローカルなイノベーションを探る－手織り敷物「パトゥ」生産の事例から－」（吉田雄介）

＊＊書誌情報＊＊

原 隆一・中村菜穂 編『イラン研究 万華鏡－文学・政治経済・調査現場の視点から－』、大東文化大学東洋研究所、2016年12月、菊5判、273頁、本体5,000円＋税、ISBN：978-4-904626-26-9

『大野盛雄 フィールドワークの軌跡 I — 50年の研究成果と背景 —』

原 隆一・南里浩子 編
大東文化大学東洋研究所



大野盛雄東京大学名誉教授(1925-2001)は、日本、南米や西アジアなど世界各地の村落経済研究に大きな貢献をなした人文地理学者である。各所の調査地に長期滞在して村落経済の定点観測をおこなう一方、ユーラシア規模の踏査旅行にもとづく比較研究を実施するなど、深く、かつ広い視野をもったフィールドワーカーであった。

大野先生の研究は、あくまでも現地調査にこだわった地域研究に特徴がある。対象地域が日本、南米、西アジアという大きく3つの地域にわたり、晩年、本人が語っていた「三角形比較文化論」という名称で捉えることができる。

半世紀以上にわたって調査現場で収集、記録した資料の大部分は、フィールドノート、日誌、原稿メモ、手書き地図などの書類資料、写真や動画などの画像資料、録音テープなど音響資料と膨大な一次資料が残されていた。

この本は、前述の一次資料を整理再

検討しつつ、50年近くの調査活動の軌跡を辿り、先生自身の目で、また言葉で語らせようと試みたものである。

本書の中心である第2章「研究の軌跡」では、日本、南米、そして西アジアへと研究対象が変わるとともに研究方法や思索が深化し変遷していく様を追っている。

1950年代前半は、日本の農山漁村を中心に社会経済構造分析を基盤にした経済地理学的な調査であり、そして、1950年代後半には初めての海外調査であるブラジル、パラグアイの現地調査に赴くことになる。その後、1963年イランへの渡航をきっかけに、南米から西アジアへと大きく方向転換する。西アジアの農村調査は、1960年代のイラン、1970年のアフガニスタン、そして1970年代後半から再びイランの農村調査に取り組んでいたところへ1979年2月のイラン革命に遭遇する。国家レベルの政治変動と、革命騒ぎに巻き込まれた一農村の現状分析とその変化過程の追求が1980年代後半までの研究テーマであった。

1990年代からは、これまでの長期定点調査から広域横断型の新たなテーマである「米の道」調査プロジェクトに邁進する。その過程で、もう一つの西アジア地域であるトルコに大きくシフトし、最晩年の仕事はアナトリア高原の地方町カマンの調査研究であった。

本書の内容は次のとおりである。

第1章 フィールドワークの記録

1-1 大野盛雄 略年譜

1-2 大野盛雄先生の想い出

1-3 調査歴

1-4 著作リスト(著書・論文・研究発表・講演・新聞記事)

第2章 研究の軌跡

2-1 日本—1950年代前半

2-2 南米—1950年代後半

2-3 イラン農村(1)—1960年代前半

2-4 アフガニスタン—1970年

2-5 人文地理学を再考する—1960年代後半

2-6 イラン農村(2)—1970年代前半

2-7 イラン革命—1980年代前半

2-8 日本での活動(1)—1980年代前半

2-9 「イラン農民のドラマ」—1980年代後半

2-10 「米の道」プロジェクト—1990年代前半

2-11 トルコ研究—1990年代後半

2-12 日本での活動(2)—1980年代以降

本書に関連する次の3点を附記しておきたい。第1は、「大野盛雄フィールドワークの軌跡シリーズ」(全4巻・予定)の第1巻総論編にあたるものである。第2に、本書で利用した資料は「東京大学総合研究博物館所蔵 大野盛雄教授旧蔵資料目録」として、2017年8月に刊行予定である。第3に、現在、片倉もとこ記念沙漠文化財団関係者を中心に、半世紀以上前、西アジア乾燥地域を中心に調査研究を行った日本人フィールドワーカーの先達たち(サウジアラビアの片倉もとこ、アルジェリアの小堀巖、イランの大野盛雄)の調査記録の整理と再検討がすすめられている。本書は、これらの動きに連動する形で執筆されたものである。本書が、沙漠文化の比較歴史的な調査研究を志す人たちにとって、有用な基礎資料となることを願っている。

※※書誌情報※※

原 隆一・南里浩子 編『大野盛雄フィールドワークの軌跡 I—50年の研究成果と背景—』、大東文化大学東洋研究所、2017年3月、B5判、197頁、本体10,000円+税、ISBN: 978-4-904626-30-6



渡邊 三津子

『サトコとナダ1』（星海社COMICS）

ユペチカ 著 西森マリー 監修



本書は、アメリカを舞台に、日本出身のサトコとサウジアラビア出身のナダが繰り広げる、異文化交流ストーリーである。大きな事件が起こるわけではなく、ショッピングに行ったり、女子会をしたり、もちろん学生の本分である勉強に取り組んだり——アメリカという異国で出会った2人の留学生とその仲間たちが繰り広げる、何気ない日常が4コマ仕立てで綴られる。

主人公のサトコは、自己主張が弱く自分に自信がない、と外国人の目には映る——つまりは、ごく普通の日本人留学生である。イスラーム教徒が「豚肉を食べない」ことや「1日5回礼拝をする」ことを知識として知ってはいても、これまでイスラーム教徒と親交があったわけではないので、深いことはよく分からない。そのあたりも、多くの日本人に共通するだろう。

もう一人の主人公のナダは、日常的にヒジャーブやニカーブ（niqab）を身にまとい、礼拝も欠かさない敬虔なイスラーム教徒の女性（ムスリマ）だ。彼女は、お化粧やオシャレも大好きだし、毎日の髪の手入れも欠かさないし、スマートフォンでの自撮りだって大好

きだ。とっても活発で自由な人である。物語は、そんな二人が出会うところから始まる。

ムスリマたちの装い

はじめて訪れた部屋で、ニカーブをまとったナダの出迎えを受けたとき、サトコは「この人と仲良くしていけるのだろうか…」と思わず固まってしまう。同じシチュエーションであれば、多くの日本人は、サトコと同じような反応をするかもしれない。このシーンでナダが着ているニカーブは、目だけを出したタイプのかぶりもので、彼女の出身地であるサウジアラビアなどの中東地域の女性たちが外出時に身に着ける。確かに、全身黒の装いは、見慣れないと少しびっくりしてしまうかもしれない。

実は、ムスリマの装いは、肌や髪の毛、体のラインを隠すことが定められているだけで、特に決まった形があるわけではない。このため、地域や人によって色々なタイプの装いがある。物語の中で、アフガニスタン出身のパキザが身に着けるのはブルカ、イラン出身の友人が着ているのはチャドルだ。もちろん、世界中にはさまざま考えのイスラーム教徒がいるので、かぶりものを身に着けていないムスリマもいる。ナダによって語られる解説を聞きながら、女性たちの装いに注目しながら読み進めるのも、また楽しい。

オシャレドレスで女子会！

作中には、しばしばサトコたちが、女子会を開いて盛り上がっている場面が登場する。既述のように、ムスリマ達は、普段、家族以外の男性の前で肌をさらすことはないのだが、女性だけの場では話が別だ。参加者が揃い、彼女たちが一斉にかぶりものを脱ぎ捨てると、さあ女子会の始まりだ。このシーンで、ナダ達は、たっぷりとした上着

の下に、華やかなドレスを着ている。最初は、そのギャップに面くらっていたサトコも、1巻が終わるころには慣れっこだ。

彼女達の女子会は、文字通り女性だけの世界である。作中でも、米国人のケビン君が、パーティに招いてもらえず悲しそうにしているが、ナダ達の出身地域では、女性の世界に男性が足を踏み入れることは許されないし、逆に男性の世界に女性が足を踏み入れることもない。故片倉もとこが、およそ半世紀前にサウジアラビアの村で住み込みの調査を行ったときも、それは同様であった。ただし、もこの場合には、外国人研究者であったことや、彼女が培った信頼関係もあり、女性でありながら特別に男性側の世界を垣間見ることが許された経緯がある。しかし、もこの夫である片倉邦雄がそうであったように、外国人であっても、男性が女性の世界を垣間見ることが許されない。また、もとこがそうしたように、仮に筆者が「女子会」に参加したとしても、こちらを信頼してくつろぐ彼女たちの様子を、研究のためだからと写真で公開することなんてとてもできない。こうした事情もあり、日本にいる私たちが、現代の中東地域のムスリマ達の日常やくつろいだ素顔を知る機会ほとんどないといっている。その意味でも、本書はとても貴重だ。

また、自身もイスラーム教徒である西森マリー氏が監修されており、イスラームに関する気負わない入門書としても、お勧めである。個人的には、難しいことは抜きに、読後に優しい気持ちになれる1冊としてもお勧めしたい。

書誌情報

ユペチカ著・西森マリー監修、『サトコとナダ1』（星海社COMICS）、講談社、2017年、B6版、128頁、本体640円＋税、ISBN：978-4063695724 / ユペチカ (@Yupetchika) | Twitter

ユーラシアの「心」での「アスタナ国際博覧会」

ジョルダヤコヴァ・サウレ（東海大学総合理工学研究科総合理工学専攻）



写真1. アスタナ万博のマスコットキャラクター「Saula（サウレ）」。サウレはカザフ語で「光」という意味で、太陽光エネルギーを表す。ちなみに私の名前もサウレ。

私は東海大学総合理工学研究科総合理工学専攻の博士1年生で、カザフスタン共和国からの留学生である。現在、環境にやさしいエネルギー源になりうる水素エネルギーについて研究している。水素をエネルギー媒体とするエネルギーシステムに着目し、その中の要素技術となる水素貯蔵材料の活用を検討し、カザフスタンのエネルギー事情を改善することも視野に入れ、水素エネルギーに着目する中で、カザフスタンで採掘可能な金属資源を用いた、低コストの水素吸蔵合金の作製を試みることを目的とし研究をしている。

産業革命以降、我々は世界的に化石エネルギー資源に依存した生活を送っている。化石エネルギー資源の大量消費は、様々な環境問題や公害問題を引き起こす原因にもつながってきている。化石エネルギー資源に依存した生活の揺がりに伴い、大気汚染・水質汚濁・酸性雨といった問題や地球温暖化を誘発する原因となっている。そのため、世界各国において再生可能エネルギーの普及が進められている。

世界で有数の石炭埋蔵量を持ち、中央アジア最大の産油国であるカザフスタンでも再生可能エネルギーの開発と気候変動対策に力を入れようとしている。自然資源が豊富なカザフスタンのエネルギー自給率は209%ではあるものの、その内の99%が化石エネルギー資源となっている。カザフスタンにおける電源構成は、石炭70%、天然ガス19%、石油1%、水力10%。石炭燃料への依存度の低減と気候変動対策の必要性から、政府は2009年6月に「再生可能エネルギー源利用法」を制定し、2024年までに発電量の5%を再生可能エネルギーで賄うという目標を掲げた。

その目標を達成するための活動の一つとして、カザフスタンの首都で2017年に開催されたアスタナ国際博覧会（以下、アスタナ万博）が挙げられる。そのテーマは「未来のエネルギー」である。「未来のエネルギー」に向けて、確実かつ持続可能なエネルギー政策やテクノロジーの開発の必要性を、産業界、企業、個人のレベルで共通の認識として持ってもらうことを目的とした。

2017年6月10日から9月10日までの間、カザフスタン共和国の首都アスタナで「未来のエネルギー」をテーマとして開催された。ユーラシア大陸の真ん中、中央アジアでは初の国際博覧会で、約115の国と地域、22の国際機関が参



写真2. 総面積25ヘクタールのアスタナ万博会場（カケン ボラシュ撮影）

加し、入場者数は約400万人だった。各パビリオンでは様々なエネルギー原、風力や太陽光のほか、波力や廃棄ゴミなどを利用した持続可能なエネルギーや技術開発の必要性を訴える展示などが行われた。

自分も再生可能エネルギーについて研究しているし、また、水素エネルギーを紹介する日本館を訪ねるため、アスタナ万博を見に行ってきた。

日本館のテーマはSmart Mix with Technologyだ。多様なエネルギーの利活用を通じて、安全性や環境配慮を確保しながら、低コストかつ安定的なエネルギー供給を実現する目標を紹介した。これまでの日本の経験と蓄積とこれから日本が推進する水素社会のゾーンがあった（写真3,4）。



写真3. 日本館の映像を見るゾーン。 写真4. 水素エネルギーについて紹介日本の経験、公害問題などについて紹介するゾーン（日本館）



3カ月の開催期間中、パビリオンを見学するだけでなく、様々なイベントに、コンサート、展示会などがあった。カザフスタンの人々にとっては各国のエネルギー開発事情のみではなく、様々な国の文化や歴史などについても知る貴重な機会だった。



写真5. 大きい球形のカザフスタン館の中の様子

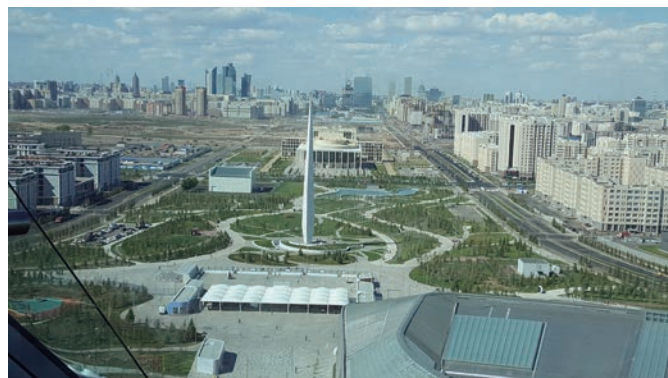


写真6. 100メートル高さのカザフスタン館からの景色写真



写真7. 子供たちが自転車で走ることからエネルギーが発生できることを体験するゾーン（カザフスタン館）



写真8. 宇宙をテーマとしたゾーン（カザフスタン館）



写真9. 万博を見た小学校1年の甥は、研究者になりたいと言った。

一緒に万博を訪ねた東海大学の先生は、子供のとき大阪万博に行って、ロボットをみてあこがれたと言っていた。今、先生はロボットを教える機械学科の教授である。

今回の万博に来た子供たちの中にも、展示内容にあこがれ

て、未来環境にやさしいエネルギーを開発する研究者となる子供がいるかもしれない。この万博が、カザフスタンの未来、地球の未来のために活躍する人材を生み出すための刺激になると良いと思った。

お知らせ

■ 2017 年 11 月 25 日 放送大学文京学習センターホールにて、「音楽・詩・舞踊を通してウイグルの魂に触れよう！」という企画を後援します。皆様のご来場を心待ちにしております。期日が近づいてまいりましたら、弊財団 HP に詳細を掲載する予定です。

日時： 2017 年 11 月 25 日（土）

場所： 放送大学文京学習センターホール
東京都文京区大塚 3-29-1

主催： 放送大学

後援： 片倉もとこ記念沙漠文化財団

お問い合わせ： 「ウイグル文化のタベ」開催事務局

TEL： 03-5395-8688 / FAX： 03-5395-8681

※ 本企画は、当財団による沙漠文化に関する一般活動助成を受け、ムカイダイス氏（放送大学面接授業講師）が企画されたものです。

■ 片倉もとこ記念沙漠文化財団 2017 年助成事業「第 4 回一般活動助成募集」のお知らせ

内容： 財団の活動目的に沿った一般活動（展示、講演、その他）を広く募集します。

募集件数：当財団事業年度（2017 年 10 月 1 日～2018 年 9 月 30 日）内に、最大 3 件

助成金額：最大 15 万円／件

募集期間：2017 年 11 月 30 日 17 時必着

公募要領、様式等詳細は、弊財団 HP (<http://moko-f.com/>) にてご確認ください。

編集後記

ニューズレター No.5 をお届けいたします。今年の関東は、雨続きで気温も例年に比べて涼しく、夏を実感しないままに秋が来てしまいました。寒暖差に負けないよう、お身体にはくれぐれもお気を付けください。（渡邊）

片倉もとこ記念沙漠文化財団事務局

〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷 2-21-1-610 号室

TEL：03-6407-9873 FAX：03-6407-9090

Mail：office@moko-f.com Web：<http://moko-f.com>

片倉もとこ記念沙漠文化財団ニューズレター No.5

Motoko Katakura Foundation for Desert Culture

News Letter

2017 年 10 月 1 日発行

編集：情報発信委員会（渡邊三津子，古澤文，藤本悠子）

発行：片倉もとこ記念沙漠文化財団